

## 社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣良次

2026. 2  
No.390

### “誕生日”とは

仏教の話に、“己(おの)が身の誕生の日は、母苦難の日”とあります。

誕生した日は、母親が何時間もの陣痛に耐え抜き、生死をかけて闘った苦難の日であり、そのご恩を決して忘れてはいけない日でもあります。「誕生の日は母苦難の日」という教えには、自分の歩みも、多くの苦勞に支えられているのだと心に留める姿勢の重要さが示されています。

とかく我々は『誕生日』というと、“生まれた本人の記念日”と捉えがちです。もちろん祝うことも大切ですが、そこには母親の苦勞があり、そのおかげで今があることも忘れてはいけないのではないかと思います。

### 命のつながり

#### —ご先祖さまに感謝する—

(吉井雅之『人生の習慣を整える』より)

私には2人の親、つまり父と母がいる。2人の親(父と母)にも、それぞれ2人ずつ親(祖父母)がいる。

これで4人。この4人の祖父母にも、それぞれ2人ずつ親(曾祖父母)がいる。

このように、自分の両親や祖父母、曾祖父母とたどって20代さかのぼるならば、総計104万8576人のご先祖さまがいらっしゃることになるのだ。

そして、さらに30代まで数えてみると、時代は平安時代末期から鎌倉時代にまでさかのぼり総計10億7374万1824人という膨大な数字になってしまう。

もっと想像力を働かせてみていただきたい。もし30代もさかのぼった10億7374万1824人のうち、たった1人でもなんらかの事情で早死していたり、男女の組合せが違っていたりしたら、あなたは生まれてこなかったことになる。

### —中略—

どんな時代でも、それぞれの人が、それぞれの人生を懸命に、真剣にまっとうして下さったからこそ、今の「あなた」がいて、今の「私」がいる。

おのずと感謝の気持ちが湧いてこないだろうか？

素直に10億7374万1824人の先祖さま全員に「ありがとうございませう」という言葉が出てこないだろうか。俗に言う「一人で大きくなったような気になるな」ではなく、「1人で今の命をいただいた」と思っているのか？と言いたくなる。私たちは今、奇跡的な確率で、ここに生きている。

まさしく我々は、先祖様のお陰で生きています。その感謝を決して忘れることなく、一所懸命に生きることの大切さを、今一度立ち止まって考えてみましょう。

なぜ、本社工場は黄色なのか

『幡豆の社はなぜ黄色?』これは、皆さんからよくいただく質問です。

平成元年に現在の本社工場を建設する際、NAG設計同人の平野先生から「工場の外観は何色にしましょう」と尋ねられました。

「一般的には「白」や「グレー」でしょう

か」とのご提案に対して私が、「この緑豊かな自然の中に建てるのだから、「緑」に溶け込むような、邪魔にならない色は何ですか」と

質問した所、平野先生の答えは黄色でした。

シヨッキングイエローのような派手な色ではなく、例えるなら、カレーのルーを明るくしたよ

うな黄色です。先生の説明は、「この地の四季折々、春夏秋冬どの季節でも邪魔をせず、

自然に溶け込む色です」というものでした。

さすがの私も決断に困り、一週間考え込みました。「今までそんな色の工場は見たことがない。本当にそれでいいのか」と悩み抜い

た末、平野先生を信じて「黄色」に決めました。

結果として、今では幡豆のシンボルに近い建築物となり、社名の看板などなくても「イナテック」だとすぐに分かる、説明不要の存在になりました。

平野先生、ありがとうございます。

イナテックの

サンキョードリンクに込める想い

サンキョードリンクの取り組みを始めて、もう10年くらいになろうとしているでしょうか。

ここで改めて、その取り組みに込めた意味をお伝えしておきます。

当時は、虚礼廃止の時代に差し掛かる頃でした。昔は「お中元・お歳暮・年賀はがき・暑中見舞」等々、イナテックも他社と同様

菜根譚後集 一一一

人之短處、要曲爲彌縫。如暴而揚之、是以短攻短。人有頑的、要善爲化誨。如忿而疾之、是以頑濟頑。

人の短所は、うまいぐあいにとりつくりてやる必要がある。もしそれをあばき立てて見せると、これは自分の短所をもって人の短所を責めるものであって、とても改めさせることはできない。また、がんこな点のある人は、うまく教えさす必要がある。もしそれを怒って憎むと、これは自分のがんこをもって人のがんこを一層つのらせるもので、とても救うことはできない。

に実施していました。しかし、それらを単純に中止するのではなく、訪問されるお客様に別の形で感謝の意をお伝え出来ないかと思案しました。

そこで、「よし! 来社されたお客様にドリンクをプレゼントしよう。しかも、玄關までお見送りをし、その場で感謝をお伝えしながら手渡してはどうか」と考えました。当初は、「大変な金額になるのではないか」「頻繁に来られる方や宅配便の方にもお渡しするのか」と色々な意見がありました。それに対する私の答えは、「すべての人に」でした。

そして今や、イナテックの文化(習慣)になっています。年間の費用で見れば、かつてのお中元などにかけていた金額と同じくらいです。

私が伝えたいのは、「本来の目的は何なのか」を常に考えてほしいということです。そうした本質を捉える思考回路を持ち合わせていただきたいと願っております。

2. 